岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

83
SUMMER
2020

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

眼の極楽㉜
花と鳥のかたち

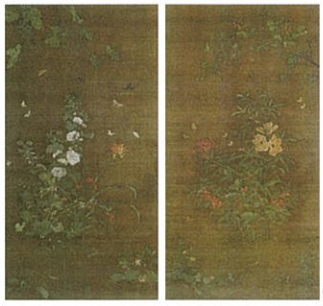
特任館長 榊原 悟

①

②

③

④


⑤

⑥

「漢」の草と虫

江蘇省常州（古名 毘陵）においては、宋代以来、その地の職業画家によって草虫画が描かれ続けた。それらは「常州（毘陵）草虫画」と呼ばれ、地域の特産品とされたが、中国では芸術品と見做されなかったため消耗され、失われたと云う（世界美術全集 東洋編8『明』「花鳥画1荘厳と墨戯」小学館 一九九九年）。しかし日本においては、舶載したそれら草虫画は、所謂「紅白川」画として珍重、愛蔵されてきた。さし詰め元代の毘陵で制作されたとも推定される『竹虫図』（伝趙昌筆 東京国立博物館蔵）に、自らの鑑蔵印「雑華室印」を捺した六代将軍足利義教（一三九四～一四四一）こそ、その代表であろうか。だがそうした愛蔵の結果であろう、少なからぬ作が現在に伝わる。なかでも、

①曼殊院本 呂敬甫筆 双幅
②東京国立博物館本 呂敬甫筆 一幅
③根津美術館本（瓜虫図） 呂敬甫筆 一幅
④群馬県立近代美術館本 一幅
⑤文化庁本 双幅
⑥京都国立博物館本 伝江済川筆 双幅

などが代表作。いずれも明代の作で、日常何びとにも親しみのある、どこの園圃にも見られる可憐で愛すべき草花を艶麗の彩色で描き、その草花を繞って大小さまざまな蝶などの虫たちや小動物を配し、一図にまとめたもの。花鳥画とは云わず、敢えて草虫画と呼ぶのも、これ故である。

そのうち①は、既に早く常州草虫画の内容と特色とを明快に論じた島田修二郎氏が、その論考で分析の対象とした作品である（島田修二郎「呂敬甫の草虫図―常州草虫画について―」『美術研究』150号 一九四八年 『中国絵画史研究』所収 中央公論美術出版 一九九三年）。前述した安土桃山時代の大画面障屏画に虫を描くのが無い点についての島田氏の見解は、或いはこうした常州草虫画に対する観察と分析・比較に基づくのだろう。図様、モチーフについての記述も詳細に及ぶ。筆者は呂敬甫。②、③の筆者も同じだ。常州草虫画を知る上で最適例である。また⑤、⑥は双幅で、取上げた草虫の種類も多い。モチーフに興味あるわたしたちにとっても見逃し難い。

なお、現状では②③④は独幅になるが、②は①の、④は⑤の、それぞれ右幅と、図様構成はもとより、取上げた草虫のモチーフもおおむね一致する。②④いずれも元来は双幅で、左幅を失ったものだろう。③（そのいびつな横長画面から巻子本の可能性もあるか）と、一群の呂敬甫の草虫画とは、図様構成上異なる点が少なくない⑥（島田修二郎「草虫図 伝江済川筆」『国華』717号 一九五一年 島田氏前掲書所収）とを加えれば、ほぼ常州草虫画のモチーフの大体が分かるに違いない。では実際どのような種類の草と虫が描かれていたのか。

①曼殊院本
右幅 芥子・春菊・撫子・シラクキナ・海棠
不明花あり
虻・揚羽蝶・紋白蝶・蜥蜴・不明昆虫あり
左幅 銭葵・菊・石竹・車前草・蛇苺・柘榴
虻・揚羽蝶・紋白蝶・蜻蛉（アカトンボ）・
蟷螂・蟬

②東京国立博物館本
芥子・春菊・撫子・シラクキナ・蘭・竹・蔓性
の不明花あり
虻・揚羽蝶・紋白蝶・不明昆虫あり（蟷螂か）

③根津美術館本（瓜虫図）
瓜
虻・蝶・蜻蛉（アカトンボ）・蟷螂・蟋蟀（こおろぎ）か
⑤文化庁本
右幅　黄蜀葵・鶏頭花・鳳仙花・露草・瓜・竹・フジ豆（隠元豆）
虻・蝶・蜻蛉（オニヤンマか）・蛾・蚱蜢（トノサマバッタ）・不明昆虫あり
左幅　立葵（唐葵）・萱草・撫子（カーネーション）・銭葵・菊（エゾギク）・蛇苺・茄子（なす）・車前草（おおばこ）・葡萄
虻・蝶・蛾・蜻蛉・アカトンボ・蟷螂

④群馬県立近代美術館本
黄蜀葵・鶏頭花（韓藍）・鳳仙花・露草・瓜・薊（あざみ）
虻・蝶・蜻蛉（オニヤンマか）・蟋蟀（こおろぎ）か
⑥京都国立博物館本
右幅　芍薬・春菊・シラクキナ・不明花あり
虻・揚羽蝶・紋白蝶・蜻蛉（カナヘビ）・青蛙
左幅　菊・水仙・朝顔
虻・揚羽蝶・蠡斯（うさぎうま）・蟋蟀（こおろぎ）・蚱蜢（トノサマバッタ）・蝙蝠

同定に当っては『中国の花鳥画と日本』花鳥画の世界才一〇巻（学習研究社　一九八三年）収蔵「植物・動物名一覧」を参照した。

芥子や春菊、葵（黄蜀葵　立葵　銭葵）、萱草（かんぞう）、薊（あざみ）、露草、鳳仙花（ほうせんか）、茄子（なす）、車前草（おおばこ）、蛇苺（へびいちご）など、わたしたちの先祖がほとんど目を向けること無く、むろん歌に取上げるはずもなかったが故に、これらは、「漢」にまつわる草花と云ってよいだろう（ただし萱草は「忘れ草」とも呼ばれ、既に早く「万葉集」でも歌われている）。当然、虫や小動物についても同断である。いや、さらに云えば、これらの草虫こそは、常州草虫画の絵師や、その受容者たちの、いわば「漢」の眼が選び抜いたものと云うべきか。その意味で常州草虫画は、花鳥画のモチーフ選択における時代性や地域性、流派性を質（ただ）したいわたしたちにとっても、比較資料として見逃し難い。

つまり常州草虫画とは、結果的にはわたしたちの先祖の眼が捉えきれなかった花や鳥、虫たちまでも取上げ一図に構成したもの、と評してよいだろうか。むろん、わが国でこれを珍重したのも、そうしたモチーフ選択の珍しさからであった。その常州草虫画の珍奇さを代表するモチーフの一つこそが蜥蜴であった。王朝以来、蜥蜴を詠み、絵に描くことなど、想像を遙かに超えていたはずだ。

興味深いのは、それらの草虫を描くに際し、広く粉本が用いられている点である。例えば①の右幅　芥子とそれに留まろうとする蝶や、その右方の黒揚羽の図様は、ほぼそのまま②に、また①の左幅、対向して飛ぶ黒揚羽と紋白蝶の組合わせは、⑤の左幅に、さらに④の黄蜀葵と鶏頭花、鳳仙花は、⑤の右幅に描かれたそれと酷似し、それぞれ当該モチーフについての図像情報が、各図を描いた常州の絵師たちによって時を隔て共有されていたのである。そこに示されたかたちこそが、常州草虫画の典型。③と④に登場する蟋蟀のかたちもそれだろう。絵画の学習と制作の効率化を可能にし、しかも出来上がった作品の質を一定にさせるためには、粉本の利用がどれほど効率的か、常州草虫画の絵師たちも既に充分承知していたのである。①の左・右幅それぞれ左上に飛ぶ白と薄緑の蝶など、本来は季節が異なり別種の蝶が描かれるべきなのに、「かたち」も含め全く同一のものが描かれている。制作の効率化が図られた結果以外の何ものでもないだろう。要するに、粉本（お手本）さえあれば絵に描くことなど朝メシ前？　いや、手本がなければ描けるはずもない―さし詰め、蜥蜴を描いたバージニア本の絵師がそれであったことは改めて言うまでもあるまい。

ついでながら徳川美術館に趙昌（ちょうしょう）筆として登録されている『菜蝶図』についてもここで触れておきたい。中国で広く蔬菜として栽培されていたシラクキナが描かれているが、そのかたちは、一見して①の右幅左下に登場するそれと一致する。さらに三羽の蝶も①の右幅左上方を飛ぶ蝶と全く異なるところが無いことから、徳川本は、元は①の右幅のような一図で、その一部＝シラクキナと三羽の蝶、腹部を見せて飛ぶ蛾？　との三部分をそれぞれ切り取り、繋げたものであろう（蛾は誤って天地逆に貼り繋げた可能性が高い）。それならば、小画面にモチーフを詰め込み過ぎた感の否めない、現状での図様構成にも得心がいくはずだ。しかも、同種のシラクキナが、左右反転した姿で②にも描かれているところから、この姿こそは、呂敬甫その人に帰すべき得意の「かたち」であったのかも知れない。彼の画嚢には、その「かたち」が粉本として蓄えられていたのである。

注目すべきは車前草（おおばこ）である。わたしには子供の頃から親しんだ「相撲取り草」の名の方がしっくりくる草花だ。どこの道端や空き地にも生える。まさしく雑草中の雑草、卑近な草花（人里植物）の代表だが、漢方では葉や実が利尿、せき止めに効ある、いわば万能の薬草でもあった。その車前草が①と⑤、そしてバージニア本に登場する。この地味な草花を見る眼に違いはない。となればこれが存在すること自体バージニア本の由来を物語る。なお①と⑤に描かれた車前草については、長短二本の花茎、葉の枚数や位置など、その姿かたちが左右反転するものの合致する。常州草虫画における車前草の典型として、ここでも世代を超えて図像情報が共有されていたのである（この節、未完）。

本年二月二十日芳賀徹前館長がお亡くなりになりました。
つつしんでお悼み申し上げます。
先生に久しぶりにお目にかかり、館長就任の要請をされたのは、平成二十三年春先きでした。大震災の年です。その時の話で鮮明に記憶しているのが、毎号「アルカディア」に文章を寄せること、です。「アルカディア」は、芳賀先生が館長に着任の翌年に創刊、その後、45号から文字組みを、すったもんだの揚句、縦書きにしたことなど、先生には、広報誌というに留まらず、思い入れの強いものでした。
その巻頭にエッセイを書く―館長の責務だ、ということです。以来、「眼の極楽」と題して連載、32回を重ねました。今後とも紙面の許す限り、続けていくつもりです。
改めて先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

EXHIBITION

特別企画展

マイセン動物園展

浦野　加穂子

会期：令和２年７月25日～９月13日

ドイツのマイセン磁器製作所は、現在も西洋磁器のトップブランドとして高い評価を受けています。十七世紀以降、東インド会社によって東洋磁器が輸入されるようになり、ヨーロッパにはない純白で艶やかな中国や日本の磁器は「白い金」と呼ばれるほど、王侯貴族たち憧れの存在でした。試行錯誤のうえ、硬質磁器の製造にヨーロッパで初めて成功したのがマイセン窯です。一七一〇年、マイセンの設立者であるアウグスト強王は、王立磁器製作所設立を宣言しました。

本展では、最高級の芸術性と品質を誇るマイセンの作品群から、重要なアイテムである動物を題材とした作品をご紹介します。動物をモティーフとした美術品は、時代や地域を問わず様々な目的で制作されてきました。マイセンにおいては、アウグスト強王が権威の象徴として磁器で宮廷動物園を再現しようと、大量の動物彫像が作られました。その後も多種多様な動物をテーマとした作品が、各時代の様式を取り入れながら生み出されてきました。今回は本展覧会の各章のみどころをご紹介します。

第一章　神話と寓話の中の動物

西洋美術には神話や寓話を主題とした作品が多くあります。本章では人間を風刺した《猿の楽団》やアメリカ大陸発見により各地域の異国への憧憬を促す《四大元素の寓意》、色鮮やかな花々や小鳥、麗しいニンフ像で飾られ、十八世紀のロココ趣味をリメイクした《花鳥飾プット像シャンデリア》など、神話や寓話に登場する動物が磁器で表現された様をご覧いただきます。

《人物像水注「四大元素の寓意」》ヨハン・ヨアヒム・ケンドラー
1820 - 1920 年頃　個人蔵

第二章　器に表された動物

マイセンなどヨーロッパの陶磁器では、器にも動物の装飾が施され、愛らしさを添えています。また多くの小花彫刻を貼り付け磁胎を装飾する、いわゆる「スノーボール」はマイセンを代表するシリーズのひとつであり、徐々に鳥類や昆虫などの彫刻が付加され自然主義的要素が濃くなっていきました。本章ではスノーボール作品を中心に、皿やカップアンドソーサー、壺など器の形態のマイセン作品に表された動物たちを紹介します。

《スノーボール貼花装飾蓋付昆虫鳥付透かし壺》
ヨハン・ヨアヒム・ケンドラー
1820-1920 年頃　個人蔵

第三章　アール・ヌーヴォーの動物

アール・ヌーヴォーは十九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、ヨーロッパの美術工芸界で流行した美術様式です。これは曲線の多用に代表される有機的なフォルムを特徴とした幻想的かつ優美な装飾表現で、マイセンにも影響を与えました。同時期の動物作品は、釉薬の中に絵具を染み込ませ閉じ込めるイングレイズという技法の導入により、繊細な模様から様々な表現まで、動物のしなやかさを表現することに成功し、本物と見紛うリアルさと愛らしさを見事に両立させています。本章ではその柔らかい色合いを生かして表現された犬や猫、キリン、ペンギンなど動物たちの豊かな表情をお楽しみください。

第四章　マックス・エッサーの動物

マックス・エッサーは、一九二〇―三〇年代のマイセンで成型師として活躍した彫刻家です。マイセンにおけるアール・デコ様式を確立したひとりであり、とりわけベットガー炻器で制作した動物彫刻の作品群が彼の名を知らしめました。本章ではベットガー炻器によるパリ万国博覧会（一九三七年）でグランプリを受賞したモデル《カワウソ》やゲーテの叙事詩から着想を得た磁器製の《ライネケのキツネ》シリーズなどエッサーの動物作品に加え、エッサーに影響を受けた成型師の作品を展示します。

マイセン磁器による多彩な動物作品を通して、三百年以上の歴史を誇るマイセンの魅力、とりわけその造形技術の高さを改めて知る機会になれば幸いです。

《二匹のフレンチブルドッグ》
エーリッヒ・オスカー・ヘーゼル
1924 - 1934 年頃　J's collection

《四羽のオウサマペンギン》
エーリッヒ・オスカー・ヘーゼル
1924 - 1933 年頃　J's collection

《カワウソ》マックス・エッサー
1927 年　個人蔵

EVENT INFORMATION

関連イベント情報

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、イベントが中止または変更となる場合があります。
最新の情報は当館ホームページをご確認下さい。

■ 講演会

「マイセンの動物彫刻―バロックのケンドラーから
アール・デコのエッサーまで」

日　時／8月23日（日）　午後2時～
講　師／櫻庭美咲氏
（神田外語大学日本研究所 専任講師）
会　場／当館1階セミナールーム
定　員／70名（先着順）
※当日午後1時30分から整理券配布・開場、聴講無料

■ スペシャルレクチャー

「動物表現を通して知るマイセン磁器の様式」

日　時／8月8日（土）　午後2時～
講　師／岩井美恵子氏
（本展企画者・パナソニック汐留美術館 学芸員）
会　場／当館1階展示室
参加費／無料（ただし、当日の観覧チケットが必要です）

■ ギャラリートーク

日　時／9月5日（土）　午後2時～
担　当／当館学芸員
会　場／当館1階展示室
参加費／無料（ただし、当日の観覧チケットが必要です）

■ ワークショップ

「七宝焼のブローチをつくろう！」

動物のかたちの銅板に絵付けをして、オリジナルの七宝焼のブローチを作ります。作品はその場でお持ち帰りいただけます。

協　力／あま市七宝焼アートヴィレッジ

◆子どもコース（小学3年生～6年生まで）
日　時／8月10日（月・祝）
午前10時30分～、午後2時～

◆大人コース（中学生以上）
日　時／8月16日（日）
午前10時30分～、午後2時～

【各コース共通】
定　員／各回10名
会　場／当館地階作業スペース
参加費／各回とも1人1,000円（ブローチ1個制作）
申込締切／7月21日（火）必着
※各コースとも事前申込制
（申込方法の詳細は当館ホームページにて掲載します）。
応募多数の場合は抽選。

※写真はイメージ

関連企画

本展会期中に、岡崎市旧本多忠次邸では、企画展「はじまりのマイセン－18世紀マイセン磁器の魅力」を開催！併せてご覧ください。

連携館割引 各館の観覧チケット半券を受付に提示することで、観覧料の割引を受けることができます。

会　期／令和2年8月1日（土）～令和2年8月30日（日）
会　場／岡崎市旧本多忠次邸（岡崎市欠町）

※詳しくは公式ホームページにてご確認ください。

EXHIBITION

ただいま準備中！

企画展「小宇宙の精華 インド宮廷絵画 ―畠中光享コレクション―」

今泉岳大

会期　令和２年９月26日（土）～11月８日（日）

美博はコンセプトのひとつに「東と西の出会い」を掲げ、これまで東のアジアが西のヨーロッパに出会った十六世紀から十七世紀をテーマに展覧会の開催や収蔵品の収集を行ってきました。この時代、大航海時代の重要な契機となり、ヨーロッパだけではなく、西のイスラム、東の中国などさまざまな文化が流入したのがインドです。

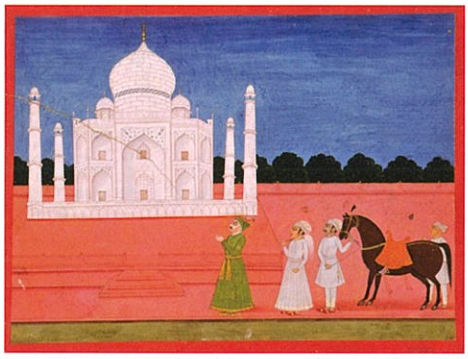
インドというと、知っているようでよく知らない国。インドといったら誰もが思い浮かべるのがカレー、しかしインドにはカレーという料理はありません。日本で一般的な「煮物」のことをあえて醤油煮とは言わないように、インドの煮込み料理の多くは、外国人がカレーと呼んでいるスパイスが使用されていることが基本なので、インド人にカレーという認識はないのです。九十年代後半のバックパッカーブームでインドに渡った日本の若者たち、二〇〇〇年問題で訪日した大勢のインド人IT技術者がその後コミュニティをつくり定住したことで各地にインド料理店が増えたこと、近年ますます拡大し日本にも進出しているインド映画産業など、私たちがインド的なものに触れる機会は増えているものの、まだまだインドについて知らないことばかり。

この秋、そんなインドの美しい文化を物語る企画展「小宇宙の精華 インド宮廷絵画―畠中光享コレクション―」を開催します。インドの宮廷絵画と聞いて、「あ～、あれね」とピンとくる人はほとんどいないと思います。それもそのはず、日本ではアジアの二大文化大国のひとつである中国美術に比べ、もう一方のインド美術の調査研究やその紹介は盛んではありませんでした。

インド宮廷絵画とは十六世紀後期から十九世紀前期にかけてムガール帝国の宮廷やインド中部から西北部の武人階級であるラージプトの藩主国の画工房で描かれた絵画です。インドには、「一枚の絵と観る人は一対一で向き合って対話するもの」という絵画観があり、それゆえ小さな画面に描かれましたが、ただ小さいというだけではなく、画面を通して豊かな世界が広がっています。それは描かれた美しさだけでなく、その奥にある内容や意味、心を読むといった絵を鑑賞する術を含めて、音楽や詩歌と同じく王侯貴族の教養とされ、宮廷人の嫁入りにも持参されるほど重要なものでした。

本展は、本国インドでもまとめて見ることは珍しい貴重な作品を紹介する展覧会となっております。ドラマティックで激動の時代に生まれたインドの芸術を是非見に来てください。お楽しみに。

「人生は橋、渡ることはできるが、その上に家を建てることはできない―インドの諺」



タージ・マハルに詣でるオーランガゼブの孫にあたるシュリ・モハマッド・シャー　1720年頃

NEW FACE

この似顔絵は 2017 年に Bangkok Art & Culture Centre で現地のアーティストに描いてもらったものです。実際にはよく黒縁メガネをかけています。

新しく美術担当の学芸員として着任しました今泉岳大です。自分の生まれたまち岡崎に、美博の学芸員として帰ってくることができて嬉しいです。美博に来て何よりは良いと思うことはロケーション、施設に美しい森と山が隣接していることです。身体を動かすことと自然が好きなので、昼休みには嬉々として瑞々しい恩賜苑と冒険の森を小走りで散策しています。

僕は20代のころ、バックパックを背負って外国をふらふら旅していた時期があります。いよいよこじれてきた思春期を引き連れて、とにかく遠くの知らないところへ行って、いいところがあればそこで暮らしてゆこうと思ったものでした。美術館・博物館は、旅のように日常や常識から離れた思考体験ができるところです。美博は山の上にあるので街からは既に若干遠いですが、みなさんが精神的にも遠くへ行けるような体験をつくれたらと思っています。

新しい環境で多くの発見と学びに恵まれて日々学芸員の仕事をやらせていただいています。それをみなさまにお返しできるよう、尽力してゆきたいです。どうぞよろしくお願い致します。

SPECIAL

芳賀前館長追悼

荒井信貴

芳賀前館長、逝く

芳賀徹前館長の訃報が突然飛び込んできた。コロナウイルスの危険性が口の端にのぼるようになった二月二六日、冷たい雨の中を東京へと向かった。青山の葬儀場で、天皇陛下、上皇御夫妻から贈られた白花に看取られての葬儀であった。正月すぎに体調が急変、八八歳、胆嚢がんでの逝去とのことだった。平川祐弘・高階秀爾の両親友からの心のこもった弔辞を聞きながら、昨年六月、最後にお会いした時の、足は弱られたがまだまだお元気で、いつもと変わりなく熱心に話し続けられていた姿を思い出していた。

先生には、前任の衛藤先生の急逝を受け、平成十年から十三年の長きにわたり館長を務めていただいた。就任直後に言われたのが「桃源郷」に関する展覧会の開催と館報の発行。展覧会の方はじっくり時間をかけてとお願いし、後者の方は翌十一年七月に本紙『アルカディア』として第1号を発行することができた。自由なテーマでエッセイをとの依頼に、第一号「地水火風心の原景にさかのぼる」以後、四九号の「回顧と感謝」に至るまで、本当に自由に書いていただいた。洋の東西、過去から現在へと時間や場所を問わず、文学・美術・歴史とジャンルを超え、興味と関心の赴くところ、旺盛な好奇心と膨大な知識に基づき芳賀ワールドを逍遥していただいた。日ごろの会話も含め、館職員はついていくのが手一杯ではあったが、大いに文化のもつ奥深さを教えていただいた。エッセイの一端は、先生の著作『藝術の国日本 画文交響』『桃源の水脈 東アジア詩画の比較文化史』へと昇華している。

エッセイのテーマを見直すと、交わした会話をはじめ様々な思い出が蘇ってくるが、先生にとって自由でアットホームな場が岡崎だったのではと思えてくる。今頃は、生前同様、先に逝かれた奥様と手をつなぎ歩かれていることだろう。（岡崎市美術博物館　元副館長）

INTRODUCTION

収蔵品紹介

堀江登志実

綿打弓（森家唐弓弦関係資料）

岡崎市材木町にあった森家の蔵に収蔵されていた綿打弓（唐弓）です。森家は江戸時代には綿打ちの道具である唐弓弦を販売していた店です。店先に掲げられていた「唐弓弦」と記された看板がそれを物語っています。

綿打弓は、綿をほぐすときの道具で、これに弦を張って弦を振動させながら綿をほぐしてゆきます。弓にしては少し変わった形をしていますが、これが「唐弓」なのでしょう。日本に木綿が最初に伝わった地とされる西尾市天竹町の神社で行われる棉祖祭にはこの形をした弓が儀式で現在も使われています。綿打弓は九本あり、長さは一五三～一五五㎝、厚さは三・五㎝です。すべてに焼印がおされ、二本には張り紙があります。焼印は「改 大極上 京 勘右衛門」「吟味改 大極上 久 大坂［ ］丁目 上ノ京［ ］兵衛」などとあります。張り紙は剥落が多く、充分な意味を解せませんが、大坂の製造元の細工人により張られたとみられ、類似品が多いために、これを改めるというようなことが記されています。

森家の屋号は「弦屋」です。寄附された店広告の版木にも「弦屋権治郎」とあります。この唐弓につける弦を商っていたと思われます。弦の販売に際し一把に六文の運上を徴収していた運上銭を入れる筒も残されています。森家では弓弦を大坂から仕入れて加工して三河各地に売っていたといい、明治の三七～八年頃までよく売れたといいます。森家近くの白山神社には大坂弦問屋が奉納した石灯籠が残され、同家との関係を伝えているかのようです。なお、残念ながら森家の江戸時代の建物は取り壊されましたが、店先の「唐弓弦」の看板は美術博物館に寄付され残されています。

店先の看板

綿打弓（唐弓）

SHOP INFORMATION

MUSEUM SHOP
YAGURA
岡崎市美術博物館

ミュージアムショップ　YAGURA

店舗紹介

2017年6月OPEN。岡崎市美術博物館で行われる展覧会の図録やグッズ販売の他、「丁寧な暮らし」をテーマにセレクトされた様々な日用品を取り扱っています。また、器などの作品を紹介する企画展やつくり手を招いてのワークショップなども不定期で行っています。

店舗情報　館内2F

営業時間／10:00～17:00
定休日／月曜日（祝日の場合は翌日）及び美術博物館の休館日
TEL 0564-83-5952　　FAX 0564-83-5953
MAIL　yagura@b-soup.com
facebook　https://www.facebook.com/museumshop.yagura

YOUR
TABLE

カフェレストラン　YOUR TABLE

店舗紹介

岡崎市美術博物館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お洒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事をすることができます。展示毎にシェフ考案のコラボメニューも登場。

店舗情報　館内2F（西側）

営業時間／11:00～21:30
定休日／月曜日（祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります）
TEL 0564-28-0141
HP https://your-table.owst.jp

YOUSED TO BE

今年度からお世話になります、米田です。本コーナーでは昔の日常について考えてみたいと思います。

明治～昭和初期、とりわけ男性には帽子がつきもので、当時の人は無帽で出かけると何か忘れ物をしたような気分がしたそうです。その市場は巨大で、昭和十三年度には全国の年間生産数が四七六万ダースにも及びます。多種多様な商品がありましたが、とくに〝カンカン帽〟は夏向けとして人気を誇りました。叩くとカンカンと音が鳴ることに名前の由来があると言われており、その直線的なシルエットから〝一文字〟の別称もあります。カンカン帽は麦わらで編んだ長く平たい紐をミシンで渦巻き状に帽子の形に縫い上げ、糊をつけてプレス機で固めて作られます。名前の通り感触が硬いほど良質とされましたが、仕上がりが気候に左右されたため、夏物でありながら湿度が低い冬期を中心に生産されていました。古くは糊にゼラチンを使っており、濡れるとふやけてしまうので、モダン・ボーイには雨が天敵でした。降るたび喫茶店に逃げ込んで、お茶代のほうが高くついたという話もあります。日に焼けて黄色くなると買い替えのサイン。山の高さ、鍔の長さやリボンなどの流行の移り変わりが日々の新聞で紹介されていました。

表紙図版：《二頭のキリン》オットー・ピルツ 1907 - 1923年頃　J's collection
《二匹のフェネック》オットー・ピルツ 20世紀　J's collection

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館
［マインドスケープ・ミュージアム］

開館時間　午前10時～午後5時
※最終の入場は閉館時間の30分前

休館日　月曜日（ただし、月曜日が祝日の場合はその翌平日が休館）
年末年始　※展示替え中は臨時休館します

https://www.city.okazaki.lg.jp/museum

ARCADIA　OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

［岡崎市美術博物館ニュース／アルカディア］　第83号　2020年7月発行
編集・発行　岡崎市美術博物館（マインドスケープ・ミュージアム）
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町字峠1番地　岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000（代表）　FAX 0564-28-5005